

---

We are X !

曇坂陽向

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

We are X!

### 【Zマーク】

Z5709H

### 【作者名】

曇坂陽向

### 【あらすじ】

リング争奪戦から、早5年が経つた。相変わらず並盛町で平和に暮らしていたツナ達。しかし、突然9代目からイタリアへ来いとの手紙が…！？『引継』を前にした、ツナ達守護者の運命は…。

## プロローグ（前書き）

タイトルは、未来編のあるお話のサブタイから引用させていただきました。

初連載ですが、何卒よろしくお願ひします。

## プロローグ

ボンゴレ・イタリア本部

「…しかし…9代目…。」

広い会議室に、スーツを着込んだ幾人もの男たちが座っている。

「なに…あと3年あるんだ。…10代目ファミリーはみんな信頼できる若者たちばかりだよ。」

この髪をはやした老人…そう、ボンゴレエ×世は、にっこりと微笑んだ。

しかし彼が10代目ファミリーの名を口にした途端会議室内は静まり、ピリピリした空気が流れ出す。

「確かに…リング争奪戦の事は聞きませんでしたが…」

「その当時のヴァリアーの強さを証明するものもありませんし…第一中学生があのスクアーロやアルコバレー…増してやザンザスに戦いで勝つなんて…」

「はっきり言いますが…確かに私も信じがたいです…。」

ボンゴレの幹部だと思われる男たちは鋭く目を光らせる。

「つまり… 私や家光の言つ事が… 信じられない」と?

9代田は溜め息をつく。

「そ… そういう訳ではありませんが…。」

「リング争奪戦当時… 雷の守護者はたつたの5歳だった事も聞いていますし…。」

「……。信じられないのが普通… か…。」

「… 皆… 流石に納得は…。」

男は分の悪そうに手を伏せた。

「……。なら… 実際に彼らに会つてみるかい?」  
9代田は少し考えた後、思いついたように言った。

「… あ… 会う… ?」

9代田の唐突な提案に驚く幹部たち。

「… あ。どうせ何を言つても無駄だろう?… ならこいつを会えればいい。その方が手つ取り早いし… みんなにも分かつてもらえるはずさ…。」

9代田は、またにっこり笑った。



**標的1 「守護者集合」（前書き）**

本編入ります。  
お楽しみ下さい！

標的1 「守護者集合」

日本・並盛町

並盛町の真ん中あたりに位置する、赤い屋根の一軒家。その一室に、華奢な青年とスーツを着た小さな赤ん坊がいた。

「…………。」

部屋は静まっている。

……ただ、青年が手紙らしきものを握りしめ、赤ん坊を睨んでいた。

「おい……何とか言えよ……。」

「それは俺の決めた事じゃねえ。とにかく従つ事だ。」

ボンゴレの殺し屋にして、アルゴバレーー、リボーン。彼は帽子をクイッと上げた。

「意味わかんねえ。」

「……わからんねえ事ねえだろ。そのまんまじゃねえか。」

青年……もとい沢田綱吉はたじろぎにたじろいでいる。

「やのまんまつて！ 分かんないよ！ こきなりイタリアに来いとか引き継ぎとか、代田の命令だとか！」

ツナはす”じに剣幕で勢いよく立ち上がった。

「……とかく、守護者を集めろ。話はそれからだ。」

リボーンは溜め息をつきながら、ツナにケータイを差し出した。

「……。」

ツナは無言でリボーンを睨みながらも、渋々ダイヤルを押し始めた。

「並盛公園に全員呼ぶんだぞ。」

「…………。」

「もうそろそろみんな来るかな…。」  
ツナはさつきからずつと溜め息をついている。

「まあ説明は全て俺に任せろ。」「……。」

それから3分ほど。

「10代目！」

「ツナ！」

入り口から入ってきたのは獄寺と山本だった。

「あ…2人とも…」

「ちゃおっス、獄寺、山本。」

「どうも。こんにちはツス！」

「よつ。」

2人が公園に入つて来るなり、何故か後から若い女の子が数人公園に入つて来た。

ちらちらこちらを見ている。

「…また余計なもん引き連れて来やがつて…」  
リボーンがボソッと呟いた。

「はは…」

ツナは苦笑いする。

「?…なんすか?」

「どうした?」

2人はもちろん気付いていない。

「い、いや、それより2人で来るなんて珍しけね。」

「あはは。偶々一緒にになつちまつてね。」

「ケツ…こい迷惑だぜ。」

獄寺は山本に対してこいつのよつて悪態をつこしてくる。

「それよかせ、電話で言つてた用件つて何なんだ？」

「あ、ああ…。実は守護者を召集したのは俺じゃなくてリボーンなんだ。」

ツナはリボーンに目をやつた。

「…まあ待つてる。守護者が全員集まつたら色々説明してやる。」

「はあ。」

「…そつか。」

それからまた少し経つた。

「…あ、…

「あ、ボンゴレー。」

「おう、沢田。」

ランボとア平だ。

「やあランボ。じきにみひか、お兄ちゃん。」

「ボンゴレー、ひついたんですか。守護者の召集つて…」

ランボはラングセルを背負つてこる。ひつやうり小学校からそのまま来たらしく。

「ちやおっス、ランボ、ア平。」

リボーンがいきなりランボと了平の田の前に現れた。リボーンは珍しくランボを名前で呼んでいる。

「おー、元気か。」

了平は一囁きと笑った。

「今日召集したのは実は俺なんだが…とにかく守護者が全員集まれば話をする。」

「?… そうか。」

了平もランボも不思議そうにしている。

^ゞ、「オオオオオオオオン！…！」

「…」「…」「…」

すると突然、地響きのよつたな破壊音が聞こえた。  
皆、田を丸くしている。

公園内は騒然としていた。

「な…」

「な、何ですかこの破壊音…」

「公園の外か!?」

「い…行こう!」

ツナ達は全員公園の外に出た。

激しく鳴り響く金属音。

「……君……よくも並盛の建物を破壊してくれたね……。」

「攻撃してきたからただ避けたんです。自分の非を他人に押し付けるものではありませんよ。」

2人の20歳くらいの青年が恐ろしいほどの殺氣を漂わせ、睨み合つていて。

そして何より目立つのは、青年達が手にしている武器じしきもの。  
……どうしてもおもちゃには見えない。

彼らはそれを構え直した。

「…………。」「

張り詰めた空気。

そして2人はお互いに相手に向かつて走り出そうとした…

「待て！」

「「一」」

しかし、その張り詰めた空気は破られた。

2人の動きも止まる。

「げ……雲雀！……と骸！？」

雲雀、骸と呼ばれた2人の青年。  
彼らの目線の先には、ツナ、リボーン、獄寺、山本、了平、ランボ  
がいた。

「……邪魔しないでくれる？今この南国果実を咬み殺してるとこだか  
ら。」

「クハツ……アヒル」ときにそんな事出来るわけないじゃないですか  
……」

(言つてる事ただの子どもの喧嘩だ――――)

ツナは心中でツツツツを入れながらも、さすがにこの状況はヤバ  
いと思つたらしい。

「とにかくやめて下さいー危険ですからー！」

ツナはこの2人とは長い付き合いだったので、こんな状況には慣れ  
ていた。

「いくら君の要求とはいえ…さすがにそれは出来ないよ。」

「…黙つて見えていてくれますか、沢田綱吉。」

「で、でも…とにかく今はやめて下さい！大事な話があるんです。お願いですから。ね？」

ツナはやんわり2人に笑いかける。

「……。」

「ちやおっス、雲雀、骸。」

「！」

そこに突然現れたのはリボーンだった。

「お前ら、今はやめとけ。そしたらツナがいつでも相手してくれるらしいぞ。それにお前らのバトルもまた今度広いところでやりやあいい。」

「は、はあ！？」

ツナの顔色が瞬時に変わった。

「ふーん。」

「ほう。」

2人に笑みが浮かぶ。

「この前は勝負がつかなかつたから…いいかもね。」

「クフフフ…勝てば…君の体も乗つ取る事ができますかね。」

「ひ…」

ツナの顔が引きつる。

「つー」と公園に戻るぞ。」  
リボーンは淡々と話を進めた。

「は……はあ……」

他の守護者たちはたじろいでいる。

「ちょ、リボーン……うなるといつも俺頼みじやん！  
この前雲雀さんの相手したばっかだし！あの時体中傷だらけになつ  
て膿できでずっと痛かつたんだぞ！？」  
ツナは小声ながらも激しく言つた。

「人は戦つて強くなるもんだ。」

「こんな時だけ正論めいた事言つなよ！」

ツナの反発も虚しく、リボーンは適当にあしりつた。

「ボンゴレー俺は雲雀さんにも憧れていますけど、ボンゴレンの方がも  
つと尊敬します！だから勝つて下さいね。」

ランボが雲雀に憧れているのは、イーピンの影響なのだが、それ以  
上にランボはツナを尊敬していた。

「ラ……ランボ……」

ツナは否定も出来ず、半泣きになつている。

「ツ……ツナ、ファイトー。」

「あ」

「えつと……お氣の毒……つス……。」

「いやちよつと」

「極限勝てー沢田ー

「……」

それぞれ言葉をかけてくるのはいいが、なんの慰めにもなってない  
い。

「何で俺がこんな目に……」

(しかもまたあの2人と…)

「つていうか、何で今日は骸な訳? クロームはどうしたの?  
(クロームだつたらこんな風にならずに済んだのに…)

「すみませんね僕で。いいじゃないですか、暇なんですよ。」

「そ……そ……」

(なんかすねてるーーー…)

… そしてなんやかんやしている内に、ツナ達は公園に戻つて來た  
のだった。



## **標的1 「守護者集合」（後書き）**

次から手紙の内容についての説明に入ります。

## 標的2 「9代目」の命令（前書き）

9代目の手紙の詳しい内容と、その意味とは…？

## 標的2「9代目の命令」

並盛公園

「……やあ、やっと落着いたな。」

リボーンはやれやれ、と溜め息をつく。

(落ちつかないよ……)

雲雀と骸が未だに険悪な雰囲気を蔓延させているのだ。

「とにかく大事な話だ。全員心して聞けよ。」

リボーンはフランコの隣に腰を下すと座った。

「まあ守護者を全員集合させねばならぬ事の大さは察しているだろうが……。」

リボーンはソード一息置いた。

「……。」

守護者達は息を呑む。

「…実は今日の朝、イタリアにいるボンゴレの代目から手紙が届き、ある命令が入った。」

「…………！」  
リボーンがボンゴレ9代目、と言つた途端にその場の空気が一変する。

「…もう單刀直入に言つが…3日後、ボンゴレのイタリア本部に守護者全員で来い…との事だ。」

「…な…」  
守護者たちは田を見開いてくる。

「…な…何でだ？」  
山本が驚きながらも尋ねた。

「ああ。…つい先日、ボンゴレの本部で幹部会議が行われてな。  
…実は…9代目は高齢のため、9代目自らが10代目ファミリーとの引き継ぎを3年後に決めたらしいんだ。」

リボーンは帽子の鍔を下げる。

「え…10代田ファミリーって…」

「俺達…ではないか…」

みんな騒然としている。

「その通りだ。」

「……。」

ツナはため息を静かに吐いた。

「…しかし…その引き継ぎの件と命令の繋がりがわかりませんね…。」

「わざと驚いていない様子の骸が、無表情に尋ねる。

「…つまつ、10代田ファミリーとの引き継ぎを決めたのは9代田

の独断だ。

その意思を9代目は幹部達に会議で話した。

「…その時の幹部達の反発が…それは厳しいものだつたらしい。」

リボーンもまたいつもより大きめに溜め息をついた。

「それって要するに…俺たち10代目ファミリーが9代目ファミリーに受け入れられなかつたつてことっスか？」

獄寺は神妙な顔付きで聞いた。

「何でだ？俺たちはリング争奪戦でちゃんと勝つて認められたんじやねえのか？」

山本は不思議そうに聞く。

「事実だと分かつていても疑念は抱くだらう。  
ただの中学生の集団がヴァリアーに正当に勝つはずがない…ってな。それに9代目の幹部達はお前らのことによく知りねえ。」

「…俺はまだマフィアなんて…」

ツナがボソッと呟く。

「…まて小僧！俺達は確かに最高の人選ではないか。それを知らないという理由だけで片付けられては理に合つとらん！」  
しかしツナの弦きは、了平の大声によつてかき消される。

「…そつ怒んな。幹部達が反発すんのも…まあ仕様ねえつちや仕様ねえんだ。」

「…？」

「幹部達は、お前らが10代目に就任した時の事までちゃんと考  
てる。つまり、お前らが下の構成員たちに尊敬されるような強さと  
人柄を持っているか、

またそれまでの経歴や人種まで考えてんだ。

9代目幹部達はお前らの実際の強さや人柄、外見はよく知らねえが、  
経歴や人種までかなり詳しく調べてるからな。」

リボーンは守護者達をジッと見る。

「…それで9代目の幹部達は、俺達には10代目になる資格がない  
って判断した…そういう事ツスか?」

獄寺は厳しい顔をしている。

「一概に決め付けた訳じやねえが…まあそういう事だな。マフィア  
のボスや幹部にするにあたって、お前らには色々問題があるんだ。」

「……問題?」

守護者達は怪訝な顔をしてリボーンを見つめている。

「…ああ。まず一つ、守護者の構成だ。お前らの中で、純粹なイタ  
リア人は骸とランボの2人だけだ。

初代の子孫のツナとクウォーターの獄寺を抜いてもクロームを入れ  
て4人は純粹な日本人ということになる。

だから人選が偏ってるって意見があるんだ。」

リボーンは無表情ながらも少しトーンの低い声で言った。

「でもボンゴレは日本巣鳳なんだろ？それにみんなイタリア語喋れるし…」

最初からイタリア語が話せるランボと骸と獄寺以外の守護者達は、各々の家庭教師にイタリア語を教えてもらつたり、独学で勉強したりして簡単なイタリア語は話せるまでになつていた。

「いくらボンゴレが日本巣鳳つつたって、守護者の半数が日本人なんて異例中の異例だからな。

それに守護者がイタリア語を話せるのは当たり前のことだ。」「…。」

守護者達は少し眉をしかめた。

「さじも一つの問題だが…簡単に言ひつと、年齢だ。お前らはア平、雲雀、骸以外はまだ未成年だ。

それは3年経つてもまだ若い。

ランボに至つては3年経つたつてまだたつたの13だ。

流石に中学に入つたばつかのガキにはついていけない…そう言つ奴もいる。」「…。」

ランボはムスッとしている。

「…跳ね馬は…14、5でキャッバローネのボスになつたと言つていたよ。」

「…。」

そこにずつと黙つていた雲雀が発言した。

自ら発言なんてめったにしない雲雀に、他の守護者達は驚いている。

「確かに、雲雀の言うとおりだ。俺も『ディーノ』さんから聞いた事あるし、ランボの分は俺達で補える。」

山本は真っ直ぐリボーンを見た。

「ああ……それはそうだが、あの時の『ディーノ』とお前らの状況は全く違うんだ。」

リボーンは相変わらず目線が下に傾いている。

「…？」

「『ディーノ』はな、ボスである父親が亡くなつた為に、『ディーノ』一人がボスになつただけで、

他の人事異動は全くなかつたんだ。

しかしお前らはボスだけじゃなく、幹部までじつそり入れ替えをする。それにはお前等は少し若い。」

リボーンの声が、いつもより低いように聞こえた。

「それにキャッバローネは今でこそ巨大ファミリーだが、『ディーノ』がボスになつたばかりの頃のキャッバローネはまだ中小ファミリーの1つでしかなかつたからな。

その当時のキャッバローネと今のボンゴレではデカさが違つ。」

守護者達は言い返す事もできなくなつた。

「それに加え強さも分からなくなると…反発はさらに激しくなる。

…そういう事だ。」

「…つまり、イタリアに呼ばれたのは俺達の強さや人柄を9代目の

幹部達が知る為つていつ事ですか。」「獄寺が鋭い田で言つた。

「ああ。… わすが、察しが良いな。」  
リボーンはニシと笑つた。

「い、いえ…」

獄寺は恥ずかしやうに頬をかいた。

「でも…俺達の強さを知る為つて… またか戦わせんの… ？」  
ツナは恐る恐る聞いた。

「… わあ、じうだらうな。」

「じうだらうなつてー。ランボは無理だぞー。まだリングに炎も灯せ  
ないんだ！

「これといった技も無いし、第一学校はじうあるんだよー。」  
ツナはいつになくペロペロしている。

「ボンバー…」

ランボは悔しそうな顔をした。

「命令は命令だ。それに学校なんて休みやがれ。」

「休む理由はじうなんだよ。」

「インフルエンザ」

「めちやめちや季節はずれだろーー現在進行形でポッカポカじやな  
いかーー。」

山本は手で口を覆つて笑いをこらえている。

「ま、そうペリペリすんな。何を言おうがお前ら第九代田の命令に従え。…それだけだ。」

リボーンは鼻をフン、とならした。

「……ちょっと待つてよ。」

声を上げたのは…もちろん、雲雀だった。

(まあ…こいつが素直に従う訳ねえな)

「…何だ雲雀」

「何故僕がそんな所に行かなきゃならない訳?」

雲雀は目をギラギラ光らせている。

「それは…お前がボンコレ10代田の守護者だからだ。」

「…そんなの関係ないよ。僕は並盛の秩序だ。ここを離れる訳にはいかない。」

雲雀は鋭い目でリボーンを見ている。

「…並盛は他の奴らに任せればいい。それにお前が存在するだけで並盛の風紀は乱されねえ。」

リボーンも雲雀と負けないくらい鋭い眼差しで雲雀を見返す。

確かに雲雀の不在中に並盛になにかあれば、雲雀が帰ってきた時に咬み殺されるのは必至だ。

「…それでも僕がイタリアに行く理由はない。」

雲雀は眉をしかめた。

不覚にも他の守護者達の背筋に悪寒がはしる。

雲雀はかなり機嫌が悪いらしい。

「……わいつたはずだ。お前はボンゴレーの代田雲の守護者だ。

」

「……。」

雲雀から殺氣のよつたものが感じられた。

しかし、リボーンはその殺氣をものともしない。

「……たく……それなら聞くが……お前は何故そのリング争奪戦以来今までずっと肌身離れずそのリングを持つてんだ？」  
リボーンは雲雀の右手中指につけてある雲の刻印の入ったリングに皿をやつた。

「……。」

雲雀も皿分のリングに皿をやる。

「そのリングはボンゴレーの雲の守護者の証だ。お前はそのリングの意味知った上で、ずっとそのリングに炎を灯して戦ってきたんだろ？」

？」

リボーンはそれから少し口元を緩めた。

「それに、イタリアに行けばこいつらの中の誰かと戦えるかもしねえぞ。」

リボーンはずっと黙つて聞いていた守護者達を指差した。

「 「 「 「 も？」 「 」 」

骸以外の守護者たちから冷や汗が出る。

「せつを盡つただろ。9代田が幹部達にお前らの強さを見せたいんなら戦いをさせるのが一番だ。

つまり守護者同士で戦わされる可能性が一番高い。」

「はあー…せつを『あなた』って盡つたの誰だよー。」

ツナは威勢良く反論する。

「良いじゃないですか、ボンゴレ。君や雲雀恭弥と戦えるなんて…一方骸はノリノリである。

「ふうん…なら盡つてみても良いかもね。」

案の定、雲雀は一やりと笑つて答えた。

(なんか超行く気になつてるーーー)

「あ…」

ツナは、服の裾を引っ張られるのを感じた。

「ア…ランボ…」

ツナが振り返ると、ランボが自分にしがみついて半泣きになりながら震えていた。

「俺がいたら…絶対認められません…！」

「0代田ファミリーはダメだって言われます…。」

俺だけのせいで…他の守護者はみんなすりじゃへ強いのだ…。  
俺戦えないよ！どうしようつツナあ～！」  
(口調が最後の方だけ昔に戻ったな…。)

「ランボ…お前がまだ10歳つて事は9代目ファミリーの人達もみんな知ってるから、ランボはランボに出来る事をすればいいんだ。何か無理な事要求されたら俺がちゃんと言つてやるから。それについてもイーピンと修行頑張ってるから大丈夫だつて。」  
ツナは優しく言つた。

「俺に…出来る事…ですか…」

ランボはボソツと呟いた。

「そうそう。」

ツナはランボの頭を撫でた。

それを見ていたリボーンはフン、と小さく笑つた。

「とにかく、イタリア行きは明後日だ。この公園に10時だぞ。後、服装はスーツな。」

リボーンは柵からピヨンと飛び降りながら言つた。

「え…俺スーツなんて持つてねえけど…」

「買え」

「ええ…？」

「マ…マジすか…」

「マジかよ…」

「今極限に金が無い！」

「僕はクロームの分とで一着も買わないといけないんですけど…」

「…。」

「俺のサイズのスーツなんて無いんじゃ……  
みんなスーツは持つていないうらしい。」

「ま、そういう事だ。じゃあまた明後日な。」  
そのままボーンは俊敏な動きで公園を出て行った。

「…………。」

守護者達は睡然としている。

「な……なんていうか……。  
みんなごめん……いきなり呼び出して……と、とにかく……帰つたらイ

タリア行きの準備しといて。じゃあ、今日はもう解散つて事で。」  
ツナはいきなりのことで頭を整理しきれていなかつたが、なんとか  
声をだした。

「オッケ。イタリア語の練習もやつとくわ。じゃあな、みんな。」

「わかりました。じゃあまた明後日会いましょう。」

「極限了解したーじゃあなー！」

「……じゃあね。」

「了解しました。クロームにも全て伝えておきますよ。」

戸惑いを見せながらも、守護者達は各自言ひ残して次々と公園から  
出て行つた。

「……何か公園の中、女人が多いな……。」

ツナは公園を見回した。

異様に女性の数が多く、ほとんどの女性が黄色い声でひそひそ話している。

(守護者つて…あれ強とか以前に顔で決めたんじゃないか！？)

「あの…ボンゴレ…」

ツナはまたシャツが引っ張られているのを感じた。

「あーランボ…。お前は帰らないの？」

ツナはハッとして、答えた。

「ボンゴレーあの…俺、明後日までにリングに炎灯して、新しい技完成させます！」

「…ランボ…？」

ツナはいつもの泣き虫少年が一瞬頬もしく見えて、幻覚でも見ているんじゃないかと思つた。

「3年後…俺も守護者として、少しでも戦力になれるよ！」になりました。

「それで…もつと修行して尊敬するボンゴレとか雲雀さんみたいになります！」

でもそれはやつぱりランボだった。

「俺と…雲雀さん？」

ツナは優しく微笑みながら尋ねた。

「はー。イーピンが雲雀さんはボンゴレと同じ位強くて格好いいんだよつてこつも言つてくるんです。」

ランボは少し頬を染めて、頭をかいている。

「あ……ははは……。同じ位強いかはわからないけど、俺なんかより雲雀さんの方が断然格好いいよ。」

ツナは恥ずかしそうに言った。

「そんなことないですよー。俺すげーボンゴレ格好いいって前から思つてたんですけど!だから俺、ボンゴレみたいになりたいって思つたんですよ。」

「あ、ありがとうございますランボ。そんなこと言つてくれのお前だけだよ。」

ツナはランボの小さい頭に手を置いた。

「…ねえボンゴレ。一緒にスーツ買ひに行きましょう。奈々さんと言つたら俺のも買つてもらえるかな…。」

ランボは田を上に泳がせてくる。

「大丈夫だよ。母さんにはぢやんと言つてやるから。  
…今から買ひに行こつか。」

ツナはふう、と溜め息をついてから、歩き出した。  
それにランボも続く。

(あのウザかつたランボがよくここまで成長したな…。最近急に成長した気がする…。まあまだ泣き虫は変わってないけど。)  
ツナは本当の兄のよつた田でランボを見ていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
.  
..

## 標的3 「それぞれの想い」(上)・(前書き)

終わり方が中途半端ではあります、一応(上)なので、お許し下さい。;

「ふー……

獄寺は田の前にあるスーツケースを前に、大きく溜め息をついた。

(やっと準備終わったぜ……。三泊つづても結構な量だな。)

「3年後……か。」

そう、3年後守護者達はマフィアの幹部としての生活を送つて行く事になる。

それを確実にする為に明後日、自分達はイタリアへ発つ。

「イタリアか……随分懐かしいな……」

といつても、獄寺にとっての第一の故郷……それはやはり並盛だった。

この地で、獄寺の親友であり、最も尊敬するツナと、他の守護者達と出会つたのだ。

そして他にも色々な出会いがあつて、考えてみれば、思い出が溢れるように浮かぶ。

「……俺は……ただ時間に身を任せただけだ

(この時間を生きられるなりそれでいい)

それが獄寺の答えだった。

\* \* \*

「はーあー……」

山本は血室のベッドに仰向けて寝転がっていた。

(準備つて結構大変だな…)

机や床の上には服やら生活用品やらが散乱している。  
どうやらまだ準備は終わっていないらしく。

「…イタリア…」

(つて…地中海のところだったよな…)

何とかイタリア語は話せるよくなつたが、やはりまだ不安はあつた。

「マフィアって…何か今まで実感沸かなかつたんだけどな…」

山本がマフィアをちゃんと知ったのは、高校生位の頃だったか。

(マフィアになつたら並盛にもあんま帰つて来れねえよな…。)

「つて…

ふと、気が付く。…山本は色々な意味でゾクッとした。

(…野球…やっぱ出来なくなんなのかな)

(守護者は確かにボンゴレの最高幹部なんだよな……。……リリのダチにもずっと念えなくなるのかな)

色々な感情が込み上げてくる。

「……あ、そつか」

マフィアになるって……やつこいつ事なんだ。

(俺つてやつぱバカなんだな……。覚悟も意識も……何もないわ……。今気づいた)

山本は仰向けになっていた体を横に倒して、机や床に散らばった服やらなんやら眺めた。

(俺……今さっきまで『俺は将来野球選手か、無理だつたら寿司屋継ぐんだ』って……思つてたな……間違いなく)

「俺は獄寺とは違うな」

山本は声に出して少し後悔した。

「ちょっと散歩でもするかな。」

山本は少しへため息をついて、すくっと起き上がった。

\* \* \*

『お前はそのリングの意味知った上で、ずっとそのリングに炎を灯して戦ってきたんだろ?』

『お前はボンゴレーの代田靈の守護者だ。』

「……。」

そうだった……、分かつていた。  
心のどこかで、認識していた。

「はあ  
……」

雲雀は珍しくため息をついた。

電気も付けないで、薄暗い白室の床に座っている。

「  
……。」

雲雀は、ふと、少し前にリボーンから聞いた事を思い出した。

- 守護者にはファミリーに絶対に入らなければならぬといつ縛り  
はない -

《別に収集がかつた時以外は自由にしてりやいい》

(…僕がボンゴレに入る訳がないと思っているのか…)

雲雀は少し笑つた。

「心外……だね」

群れるのを異常な程に嫌う雲雀が一般企業に就職なんて100%有り得ないし、雲雀の一番の取り柄といえばやはり戦闘だった。

（ボンゴレに就職……素晴らしく面白そうじやないか）

ボンゴレには、自分が認める数少ない人間がみんないる。そして、いつでも戦える。

それに…

「あの男の部下になるのも悪くない。」

雲雀は更に口元を緩め、不敵な笑みを浮かべた。

\* \* \*

「あー…。『気にせつたから疲れたな…。』

ツナは並盛町の真ん中を流れる河川の土手を歩いていた。  
ランボとスーツを買いに行つた後、家に戻つて準備をしていたらし  
い。

（…ひらり準備は終わつて、今は気まぐれに散歩してこようだ。）

「…………。」

（俺が…イタリア有数の巨大マフィアのボス…）  
ツナはため息をつく。

（…ずっと俺は…マフィアのボスになんてならないつて思つてき  
た）

ツナは歩きながら横田に川を眺める。

（でも俺は…『マフィアのボスになる』つてことを、イタリアに行  
つて証明するんだよな）

ツナは無数の矛盾を感じていた。

「不思議だな」

(俺は…何で…)

「沢田さん！」

「！？」

いきなり高い声がツナを呼んだ。

「沢田さん！ イーピンだよー。」

ツナはバツと後ろを振り向いた。

「あ…イーピン…トランボモ…」

た。イーピンが土手の草村から手を振つてゐる。その後ろにランボがい

卷之三

ツナはイーピンとランボの元に走つていった。

「修行やつてる！」

ランボね、リングから炎出ない。」

「…仕方ないさ。ランボはまだ十歳だもんな。まだ覚悟なんて分か

らない歳だよ。

俺だって15の時に苦労した末にやっと炎出たんだから。  
ツナはランボに手を向けた。

「で…でもボンゴレー・ロングから炎も出せない守護者なんて…」

「焦らなくて良いんだよ。お前今新技開発中なんだろ?  
まずそっちから頑張った方が良いんじゃないかな?」

「…でも…ランボさんトイレ行きたくなっちゃったんだもん…」  
…また口調が昔のように戻った。  
ランボは口をとんがらせてくる。

「ウソ!ホントはしじみだけでしょー!」

「ウソじゃないもん!」

「ま、まあまあ…ここじゃん…さつきまで修行頑張ってたんだろ?  
ちゅつと休憩にしてよう。ランボもつこどに家に戻つてトイレ行って  
来いよ。」

ツナは掴み合このケンカになる前に割つて入つた。

(今日ケンカの仲裁ばっかりだよ…)

いつも思つが、周りの協調性の無むむが呆れる。

「…じゃあ、行つてきます!」

「ランボはたたたつ、と逃げるよつに走り去つていつた。

「すぐ戻つて来いよー！」

「はあいー！」

「…もう、ホント仕様がないなあ…」

イーピンは大きくため息をついた。

(イーピンも大変だな)

「イーピン、いつもランボの修行に付き合つてんの？」

「うん！ランボ、1人じゃ何もできないもん。」

「はははー！偉いな、イーピンは。」

「えへへ…」

イーピンはニコニコと笑つた。

「…立ち話もなんだし、階段に座るうか。」

ツナはコンクリートの階段を指差した。

「うん。」

2人はランボの帰りを待つべく、ゆっくりと階段に座つた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
•  
•  
•

#### 標的4 「それぞれの想い（中）」（前書き）

遅くなつてすみません！

実は今回（下）ではなく（中）です。

「それぞれの想い」はあと少し続きます。

標的4 「それぞれの想い（中）」

2人は並盛町の端にある土手にいた。  
もう、陽は落ちかけている。

「なあイーピン。」

「何ですか？沢田さん」

「何でランボ、最近になつて俺の事『ボンゴレ』だなんて呼び始めたのか知ってる？」

「ずっと不思議に思つていた。

かなり急にそう呼ばれるようになり、正直ツナの方が戸惑つた。

「ああ…。ランボね、いつもわがままだしょ？だから私言つたんです。

『そんなんがまましてるからランボは目にもかけられないの！沢田さんは特別優しいだけなんだから！今守護者は7人じゃなくて6人だよ！』…つて。

イーピンはフン、と鼻をならす。

（す…凄まじい…）

「…よく言つたね…そんな事…」

ツナは苦笑いしている。

「それくらい言わなきゃ分からなによ、ランボは。」

「…それからあんな口調になっちゃったの？」

「うん、ホント分かりやすい。」

イーピンはまつたく…と小さく歎いた。

（イーピンは元々しつかり者だったけど…最近は更にたくましくなつちやつたな…。）

イーピンはこの歳で何でも一人でできたり、ランボの面倒を見る余裕さえあるほどだった。

「イーピン、これからもランボとずっと一緒にいてあげてね。」

「? そんなの当たり前だよ。」

「ははは、それもそうだな。…まあこれからもランボと仲良くなれてね。」

「…?…はい。」

イーピンは首を傾げながら笑った。

\* \* \*

「あーあ…」

山本は並盛町を適当にぐるぐる歩き回っていた。

(早く準備しねえと駄目なのになー…)

「どうだつつかな…」

山本は気が付くと並盛町の端にある十手を歩いていた。

昔、ツナと獄寺ヒョウの辺りを歩いたのを覚えていた。

学校帰りに通ると大きな夕日が出ていて、ツナや獄寺の髪を染めていた。

ツナの茶色っぽい髪は更に赤みを増して、薄く鈍い光を放っていた。獄寺の銀色の髪は光に反射して、オレンジ色の光がキラキラと輝いていた。

「俺は……」

（真っ黒だったな、多分。）

自分で自分の髪が見えた訳ではない。

ただ、自分の髪は真っ黒で、色は変わらないだらう。  
…そう思つたのだ。

（…俺自身もそうなのかも。）

自分は生まれてこの方、ずっと野球選手になりたいと願つてきた。

マフイアになるなんて、思つわけもないのだ。

(俺は生まれた時から真っ黒に染まつていて、違う色には光れないのかもしない。)

(とうか)

光りたくない…?

キラ、と一瞬煌めいた光。

…あの頃と全く変わらない、薄く鈍い光。

「ツナ！」

髪が揺れ、その後映つたのはいつもの優しい笑みだった。

\* \* \*

「そつかあ、ツナ準備終わったのな。」

「うん。それにしても珍しいね、山本そつこうのひっこも早いの。」

ツナと山本は土手をゆっくつと歩いていた。

「……まあなんか気分が乗らない一つかな……。ま、また帰ったら

やるわ。」

「……そりゃ……」

「ツナはそれから何してたんだ?」

「ランボの修行に付き合つてた」

「へえ

それからは、無言だった。

「なあ

山本が不意に、ツナに話しかける。

「？…何？」

「ツナはまさ、ボンゴレのボスになつてイタリアに行く事、どう思つ  
？」

「！」

ツナは少し目を見開いてから、田線を落とした。

「……俺は……未だに分からないよ。」

「え

意外なツナの答えに、山本は驚いた。

「俺はずっとマフィアのボスになんてならないって思つてた。」

「でも、今実際にマフィアのボスになる準備を着々と進めてる。」

「矛盾してるだろ？」

「俺バカだし、もう何がなんだかよく分からなくってや。」

「……。」

(ツナも…迷つてんのか)

「……でも俺は……、最近気付いたんだ……。覚悟しなきゃなんない  
つて……」

「覚悟……」

「聞き返したのではない。……ただ、呟いた。」

「うん、最近つていうのが情けない話なんだじね……。」  
ツナは小さく笑う。

「……そつか…、覚悟…な…」

「……」

「俺なんか… わざと氣づいたんだぜ。」

۲۰

「将来のこと、選ばなきやならないつて」

卷之三

「ナは少し悲しそうな表情はなつた

「……あ！違う違う！別にツナのせいじゃないし！それに俺…マフィアになりたいって…っていうかみんなボンゴレを護りたいって思つてつから！」

山本もまた、ツガの気持ちを知っていた。

「でも山本は…やっぱり野球選手になりたいんだろ?」

「ああ……夢が2つあるなんて……欲張り過ぎるよな……」

「……そんなことないよ。夢があるのは良いいんだもん。……俺なんか夢もなかつたから。」

！」

山本はいつものようにヒーローと笑う。

「そ、そうだよー。」

ツナも山本が笑ったのにかられて笑う。

「俺さ……俺一人だけが悩んでるんだって勘違いしてた……。でも、ツナも悩んでるんだって分かつて、ちょっとラクになつたわ。イタリアに行つて……本当の答えを見つけようとついボンゴレの本部に行くことで……自分の力でどちらか選択する。」  
山本は、美しいオレンジ色の空を見上げた。

「……。」

ツナがホッとしたように笑う。

「ツナの髪の毛つてや、夕陽に当たると光つて綺麗だな。」

「え? ……山本の髪も茶色く光つて綺麗だよ。」

「ー。」

それから2人は夕陽が沈むまで土手を歩いていた。

to be continue . . .



#### 標的4 「それぞれの想い（中）」（後書き）

次回で「それぞれの想い」は終わりです。

そしてようやく守護者たちはイタリアへ旅立ち、ボンゴレのイタリア本部へと向かうことになります。

そこで、アンケートを取りたいと思います！

ボンゴレ本部に行くにあたって、出して欲しいキャラや、絡ませて欲しいキャラなどを募集します\* +  
是非ご参加下さい！ m(—\_—) m  
心よりお待ちしております。

## 標的5 「それぞれの想い（下）」（前書き）

お待たせしました。

すく遅れてしまつて、申し訳ありません！

まず注意して頂きたいのですが、この小説の設定として、

登場するキャラは未来編を経験していない方のキャラ達です。例えば、この小説のツナは10年後に行つたツナではなくて、昔の自分達を10年後に行かせる原因になつたツナです。

分かりにくくてすみません……

そして注意2個目。

私はあまり意識せずに書いたのですが、少しだけツナ×京子、獄寺×ハルの要素が入つていると思われる方がいるかもしません。あつてもほんの少しですが、一応ご注意下さい。

長々とすみませんでした。

では本編へどうぞ！

## 標的5 「それぞれの想い（下）」

並盛の近くにある町、黒曜。

その黒曜に、黒曜ランドという廃墟がある。

そこは鬱蒼としており、かなり不気味だ。

しかし、その黒曜ランドには5、6年ほど前から人が住んでいる。

「クローム、」

千種はいつものようにトーンの低い声でクロームびくんの名を呼んだ。

「何、千種」

彼女は手を止めて、千種の方に振り向く。

「犬が昼ご飯買つて来てくれた。…食べよう。」

「…うん。」

クロームは少し笑って、いつも食事をする部屋に向かった。

\*\*\*

(これ…おいしい…)

3人は何か会話をする訳でもなく、ぱくぱくと食事を続けていた。

「はあ、ほふほ…」

すると、突然発せられた間抜けな声。

「犬、行儀悪いよ。」

口の中に食べ物を入れたまま喋り始めた犬に、いつものように千種が注意する。

「うつ ヘーメガヘーはべてる途中ひひやへりたくなつはんあよー。」  
そしてまたいつものように犬の反撃。

「犬…何言つてるとかわからない…」  
クロームがポツリと呟くように言つた。  
…これも、いつものこと。

…でも、こつものことなのに…こつもの日常なの！」

：何故か今日は空気が重い気がした。

「うつ ヘーバカ女！」

やつと食べ物を飲み込んだらしい犬が、はつきりとクロームに怒鳴りつけた。

「「」めん…」

「謝んな！」

「「」めん…」

放つておくとの会話が永遠に続きそうだ。

（ホント…仕方ないな…）

千種は小さくため息をつく。

「…で、犬は何を言おうとしてた訳？」

「は？」

犬はポカンと口を開けて、千種の方を見た。

「なんか言おうとしてたから」

「……」

すると犬は急に静かになり、少しだけ俯いた。

「……。」

千種もクロームも、犬が話し出すのを待つ。

「……別にイタリアに行って何すんだって聞こうとしただけだびょん。」

犬は少し目をそらした。

「……それは……私にもわからない。……9代目の……命令だからクロームも少しだけ俯く。」

「つーかイタリアに行つたらあのウサギの守護者にならなきゃいけねーんじやねーの？骸さんは一体何考えてんらびょん！」  
犬にまたいつもの威勢の良さが戻ってきたようだ。

「……ボスは……本当にすごい人だから……」

「……？……何か言った？クローム」

「い……いや……何も……」

「… もう」

そして3人はまた黙々と食事の手を進めていった。

\* \* \*

「お兄ちゃん、」

「なんだ京子」

黒曜と同じく、 笹川家でも丁度夕食をとつていたのだった。

しかし現在家に両親はいない。

父親は仕事、母親は同窓会だなんだ言つて帰つてこないのだ。

「イタリアに行くのは良いけど……無理しちゃ駄目だからね。」「京子の声色はいつもより暗い感じがした。

「心配はいらん。」

了平は落ち着いた笑みを浮かべる。

「ツナ君は……」

不意に浮かんだ、あの優しい笑顔。

「ん？」

「いいいや、……何でもない……」

「…沢田なら、大丈夫だ。」

「…」

さすが兄だ、と改めて思った。

「あいつの『強さ』はお前も知っているだろ？」「了平はズズッと味噌汁を啜る。

「うん！」

その笑顔は優しいが決して弱々しいものではなく、とても安心できるような、頼もしい笑顔。

(ツナ君…。)

ただ、胸がざわついたのは、彼がいつか遠くへ行ってしまうのではないかと、こう不安が心の奥底にあつたから。

クローム…

“…！”

ハツとし、気が付けば現実の世界ではなくなっていた。

クローム、

\* \* \*

彼女を呼ぶ優しい声の主は、それもいわば本当の声ではない。

“骸様”

辺つをぐるぐると見回して、少しずつ歩を進める。

しかし同じくも彼の姿はなく、ただ声が響くだけ。

よつひん、クローム

よつひん、とは聞こえても、彼自身の姿は見えない。

“はい…。今日は…どうしたんですか…？”

クロームは骸の姿を探すのを諦め、返事をした。

“…。なんとなく、話をしたかったんですよ。”

“？”  
骸は、用もなくこんな所に自分を呼び出すよつひんな男ではない。

しかし骸が話をしたいと言つている以上、とにかく何か話をしなければならないだろう。

(何か…話題…)

クロームは口数が少ないため、あまり人ととの交流もない。そう簡単に話題など思い付かなかつた。

(あ…でも)

1つ。1つだけ、あるじゃないか。

“あの…さつき犬が言つてました…。何で…骸様はイタリアへ行くのかつて…”

クフフ…いきなり難しい質問ですね。

“…。

”

あなたは、…分かつているんでしょうね。

“…はい。

”

僕も、おかしくなつたものです。

…しかし、あなたも。…僕と同じ気持ちなんでしょうね？

“はい。”

クロームは、いつもは到底見せないような笑顔で笑つた。

また、会いましょう。クローム。

“はい…。”

今度はこんな異世界じゃない。  
どうか、現実の世界で。  
神様になんて願わない。  
だから、自分達の力でこの人と再会しようと心に決めた。

ボスと共にマフィアを守つていこうという奇跡的な決意をしている  
であろうこの人を、絶対に救い出さなければならない。

(待つて下さい…骸様…)

異世界はどんどん薄れ、やがて意識は途切れていった。

\*\*\*

「……。」

ハルはエコバックを肩に掛け、ジャージ姿でコンビニにいた。

(牛乳と食パンと……後は……)

「……はあ……」

(明日……でしたっけ)

<ドンー>

「はひつー！」

いきなり後ろから衝撃がした。

どうやらボーッと突つ立つていたため、人にぶつかってしまったらしい。

「あっすすみません！！」

「ああ……悪い…………い！？」

「え……！」

ハルはとつたに振り返った。

「ハル

「獄寺さん！」

\* \* \*

「何で獄寺さんこんな時間に出歩いてるんですか！もう夜中なのに！」

「はあ！？それはこっちの台詞だバカ！女が一人でこんな時間に出歩いてんじゃねー。つか俺いくつだよ！19歳の男がこんな時間に出歩いて悪いかボケ。」

2人はコンビニの前のベンチでジュースを飲みながら、いつものように戦い騒いでいた。

「バカでもボケでもありません！違いますよ、私が言つてるのは明日イタリアなのに寝ないでいいのかつて事ですっ。」

「んなの飛行機ん中で寝るから大丈夫だ」

獄寺はフンッと鼻をならす。

「何なんですかその態度は…。ホント昔つから変わりませんよね、獄寺さんは。」

ハルはハア、とため息を吐いた。

「それはお前だらうが」

出合つてもう6年以上が経つが、2人一緒にいれば、もう喧嘩三昧である。

流石に年が経つに連れて喧嘩の仕方は落ち着いてきたものの、それでも2人の喧嘩は今でも絶えない。

「……これでも…心配してるんですからね」

「…」

いきなり暗い声を出したハルに、少しギョッとする。

「…私ボンゴレの守護者になるために皆さんがイタリアに行くってことやんと知つてるんですけどからね！」

ハルは獄寺と田も合わせずに強い口調で言った。

「……だ……誰から聞い……」

「京子ちゃんです」

「……。」

「これだけ獄寺が一方的に言われるのは珍しい。」

「わ……悪かった、言わなくて」

「……いいですよ別に……。ハルを心配させたくなかったんでしょう？  
でも今更驚きません。……マフィアの事初めて知った時に十分過ぎ  
るくらい驚きましたから。」

ハルや京子が初めてボンゴレやマフィアの事を知ったのは、高校生  
になつた頃だつたか。

「……そう心配するんじゃねえ。十代目がいる限り、心配なんて必要  
ねえよ。つーか俺がいる限り十代目は大丈夫だ。」

獄寺は少し笑つてジュースを飲み干した。

「はい……。」

ハルもまたジュースを飲み干す。

「それと……」

「ん？」

「あ、やつぱりいいですー……わもひ帰ります。ハル、お母さんとお父さんに怒られちゃいます。」

「……あ……。」

そして2人は帰路についた。

「送つてやるよ」

「お、珍しく獄寺さんじえんじぬめんですね~」

「うひせーな、置いてくわー。」

「はーい」

(やんなこと…やつぱり聞けません)

彼らがいつか守護者となり、イタリアへ行つて……またこの並盛で歸つて来れるのだろうか。

「あー、一回と念えなくなつてしまつのではないんだろ?」

でも、

そんなことを聞くのは怖すぎた。

（だって獄寺や……聞いたり本物のヒカルヒヨウヤニヤツな  
んでもん）

「また明日一臨むとを見送つて行かねー。」

「来なくていいぞアホ女」

「アホじゃないです！何が何でも行きますからねーおやすみなさい！」

明日は晴れるとこ。

そして、京子やビヨンキやイーペンと一緒にびっかり笑顔で送つてやるんだ。

…やう決めて、家に入った。

to be continue . . .

## 標的5 「それぞれの想い（下）」（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました！  
これで「それぞれの想い」は終了です。

そして前回に引き続きアンケートを行いたいと思います！

これからツナ達はイタリアへ発ち、ボンゴロンの本部へ入ります。  
そこで登場させてほしいキャラを募集するので、是非リクエストして  
やって下さい

心よりお待ちしています\* +

では改めて、ありがとうございました！

## 標題6 「出発」（前書き）

前回はたくさんの方々のリクエストありがとうございました。

早速リクエストしてくださった「ビアンキ」登場します！

とこりかこの回殆ど獄寺とビアンキが持つていっしゃった感じです

（笑）

でもせっつぱり最後の最後に持つていっしゃるのはみんなのママン、奈々さんですね（>三<）

## 標題6 「出発」

ジコ…

ジリリリリリリン…

ジリコリコリコリコーン…

ジリリリリリリリリリリーン…

「……」

騒がしい田舎まし時計の音に叩き起されたツナは、少々機嫌が悪かった。

(朝か…)

いつもなら一度寝してリボーンに飛び蹴りを喰らつといふだが、今日に限って絶対に一度寝なんてできない。

「…あ、おはよリボーン。」

机の上には、自らの荷物の確認をしてる。リボーンがいた。

リボーンもまだパジャマ姿である。

「早く起きてお前も確認しやがれ。そしたらさっそく朝食にするが。」

「うん…。」

ソナは眠たい眼を擦り、ゆっくりとベッドから下りた。

\* \* \*

台所から聞こえるリズミカルな音。

「…母さん…おまけ」

「あらー、今日はさすがにちやんと起きてきたのね。ツツくん。ツナの母親、奈々がこつもの優しい笑みを浮かべる。

「もつねの呼び方止めてくれって言つただろ…。もつ俺19なんだから」

「はい、悪かったわね。ツナ。」

5年経つて、自分の息子は夫にどんどん似てきていた。  
…とこ、奈々はそう感じていた。

「朝ご飯できるわよ。早く食べなさい。

「ランボ君はまだ眠ってるから、香港へ向かう車の中でおしゃつ食べさせてあげましょ。

あー、イーピンちゃんもお見送りしたいだらつから、イーピンちゃんにもおしゃつ作らなくちゃダメね。」

「うん。…ありがとう母さん。」

本当にこつまで経つても自分の母親は変わらないんだつとツナは思つた。

(俺がイタリアに行つても、もし何かの間違いでマフィアになつち

やつたと同じも)

「あ、それとビアンキちゃんは昨日の夜獄寺君の家に行つたわよ。今日は出発の日だし、姉弟水入らずで過ごしたいのかしらねえ。」

「え、！」

そ、その時ビアンキゴーグルかけてた！？」

出発の日に獄寺に体調不良を起こされたりしたら最悪だ。

「え？……うーん……多分かけてたと思つたビ。」

「ホントにー？…良かつたあ…」

ツナはホッと胸をなで下ろす。

「おこツナ、早くママンの朝飯を食え。」「後ろから、椅子の上にしちゃうんと座つたリボーンが、ツナに声かけた。

「…あ、うん。」

(来ちゃつたんだな…ついにこの日が…)

複雑な気持ちのまま、ツナは朝食にありついた。

\*\*\*

「まあ……むつそろそろ行くわよ隼人。」

「チツ……ひっせえんだよ姉貴……。」

ビアンキと獄寺は、丁度家を出る所だった。

「忘れ物はない?」

「無いー! つたぐー! つたー! と思つてんだぞ! こいつも! こいつも! ……」

「全く……こつまで経つてもしじょうがない子ね……。」

ビアンキはあ、と小さくため息を吐いた。

「つじか何で俺の家に来るんだーお前がいると息苦しいんだよー。」

「本当に素直じゃないんだから隼人つたり……。嬉しくならねえ言こと

なれど……」

「おやつたがひこんな幸せな思考になれるんだ……？」

（アガハラ）

二つやとは遼り、謹がしこ朝。

「うあ、行かへる

\* \* \*

「……」

「うん。 気を付けて」

少し重い空氣。 そして変な静けさ。

……それまごつも余り喋らない千種とクロームのせいではなく、いつもはつるむむこ犬のせいだ。

「お前…帰つてくんんだろーな」

「え」

「また帰つてくんのかつて聞いてんらーーー」

「……」

クロームは少しきょトンとして、

「…帰つてくる」

少し笑つた。

「…フン、なうせりやと行つてこー。」

「うそ、行つてしまふ」

「…こつらがしき」「こー

\*\*\*

ガタンゴトン… ガタンゴトン…

「……」

2人は電車に揺られ、外を眺めていた。

生憎座席は満員で、座ることができなかつたのだ。  
獄寺の足元には大きなスーツケースが置いてある。

「ねえ、隼人。」不意に、ビアンキがボソッと呟くように話しかけた。

「…あ？」

やはり獄寺は不機嫌そうに返事をする。

「…あなた達、ハルや京子達にちゃんとイタリア行きの事言つたの？」

ビアンキは、守護者達が京子やハルにマフィアの事を話すのを嫌がつていたため、この事も詳しくは話していないのではないかと思つたらしい。

「……ああ。笹川が芝生頭から聞いたらしい。それを笹川がハルに伝えたんだとよ。」

獄寺自身、昨日の晩にハルに告げられ驚いていた訳なのが。

「…そりなの。」

「…それが、どうかしたのかよ。」

「……あの子達、すべく不安なんじゃないかと思つ。」

「…………。」

それは獄寺も、何となく感じとつていた。

「きっと、近い将来…あなた達と離れ離れにならなければいけない日が来るのを恐れているのよ。」

そしてそれが正式なマフィアになるからだつて事もあの子達は分

かってる。」

「ああ……そうだな。」

その言葉の意味が、獄寺にはよくわかった。

「それに……ツナ達も迷っているわ。」

「……？」十代目が……？

ツナが迷っている。

……これは獄寺にとって結構な衝撃だった。

「そりゃ……ね。

……だってツナは……日本にママンや京子やハルを置いて行かなければ  
いけないのよ？」

「…………。」

そんなこと、正直言つて考えたこともなかった。

「いいえ、ツナだけじゃないわ。山本武だつてたつた1人の父親が

日本にいる。

それにある子には野球もあるんでしょう？

： 笹川了平 だつて京子の事が心配でしょ。つい、クロームにも仲間の事があるわ。

ランボもあの年よ、イーピンの事もあるし…不安でしちゃうね。あの雲雀恭弥でさえ、並盛を離れるのに少なからずためらにはあるはずよ。」

「……」

反論しようつと試みるが、何も言葉は浮かんでいない。

（俺は…当たり前に思つたのかもしれない）

ツナがボスになり、自分達はそれを支えていく。

ボンゴレ十代目守護者として、ボンゴレとこの組織を守つていく。

…やつ、当たり前に夢見ていたのだ。

「確かに、」

「…？」

「確かに、運命には逆らえない。…だからあなた達は絶対的ヒマツニアになるわ。」

…でも。…そんな迷いがある状態でマフィアになる事は、…死を選ぶのと同じ事よ。」

「

「……あ……あ。」

獄寺はこの姉を恐りしへ感じた。  
しかしこいつもの恐りしがではない。

(俺には見えなぞ過ぎてた……。姉貴にまかせんと見えてた……。)

「あなたは近くに歸すやうだったのよ。」

「……」

やはり、恐いと思つた。

「……俺は……十代田やアイツ等と違ひてイタリアに行こうが失つもの  
なんてねえんだ。……だから……」

それだけ言つて、また窓の外を眺め始める。

「……やあ。」

「……おい着いたぞ。」

「ああ……行きましょう。」

2人は足早に電車を出る。

「隼人、」

「？」

「私はあなた達がマフィアになつても、一緒にイタリアに行くつもりはないわ。」

「……？」

「私は殺し屋だけじ、京子やハルやママンやイーピン達を守らなければいけないもの。」

「え？ か。」

何故がゾクツとして、

ああ、やつらのとはまた違ひ、本当の恋いしたなのだなと思った。

(隼人…あなたは間違ってるわ。…あなたにもたくさん、失つもの  
はあるじやない。)

2人はただ、無言で歩いていた。

\* \* \*

この空港独特的の感じ。  
ツナは嫌いじゃなかつた。

(ついに出発…か)

「みんな……揃つたね。」

守護者が全員、入口前に集合した。

ただクロームと雲雀だけは少し離れた場所にいたが。

「じゃあ、行つてくるよ。」

ツナは奈々や京子、ハル、ビアンキ、イーピンに向かって、優しく微笑んだ。

「ツナ君、お兄ちゃん、みんな……無茶しちゃ駄目だからね。」

「おう、心配はいらん。」

「うん、ありがとう京子ちゃん。」

「私達、畠わんが帰つて来るの待つてますから。」

「…健闘を祈つてゐるわ」

「うンボ！みんなに迷惑かける駄目よー…畠わん、気を付けて。」

「…ツナ。

…必ず、必ず帰つて來るのよ。」

「…うん。みんな、ありがと。」

送つてくれたみんながくれたのは、期待なんかじゃない。

ただ、無事に帰つて来て欲しい。

その想いだけだった。

「じゃあ、行つてきます！」

「行ってらっしゃいー！」

彼女達の笑顔を見ると、やっぽり安心した。

to be continued . . .

## 標題6 「狂傑」（後書き）

最後までお読み下さりありがとうございました！

さて、前回に引き続きアンケートを行いたいと思います。ツナ達がボンゴレのイタリア本部に行くにあたって、登場させて欲しいキャラを募集中です。

皆様の「ご参加を心よりお待ちしております」 +

では改めまして、ありがとうございます（――）

## 標的7 「到着」（前書き）

本当におひやしじぶりです。

何ヶ月もほつたらかしにして申し訳ありませんでした……、  
中々物語が整理できなくて：><

不定期更新には変わりありませんが、やっと復活しました！  
この小説を楽しみにしていただいていた方に、心よりお詫び申し上  
げます。

これからもこの小説を宜しくお願ひ致します。

今回余り物語に変動はありませんが、かなり重要かつ、アンケート  
で多数リクエストを戴いたあの人気が登場です！

標的 / 「到着」

(遂に、来たんだ)

ツナ達守護者は、飛行機から一度降りたところだった。

「全員降りたな。」

リボーンが数を確認する。

「イタリアの…空氣…」

獄寺にとって懐かしい、この乾いた空氣。

「イタリア…久しぶりですね…。

この地は大嫌いですが…」

いつの間にかクロームから骸に変わっている。

「何かワクワクしてきたな…。」

「馬鹿かお前は…遊びにきたんじゃねえんだぞ…。」

「極限外国だ…!!」

「そのままですね

「懐かしい空氣……ボヴィーノを想い出します。イタリアはやっぱり良いです。」

「…………。」

「あつー雲雀さん先に行かないでください……」

「あのボンゴレ無視しないで……」

「待ちやがれ雲雀ーー十代田じいじ迷惑おかげすんじやねえーー。」

「はまつー雲雀本部の場所知つてんの?」

「極限俺も行くーー。」

「雲雀恭弥と同じ所になんて泊まりたくないですね」

「咬み殺す」

「骸おーー雲雀さんんーー！」

「ガ・マ・ン…………わあああああんーー。」

「つたぐ…なんの成長もねえ奴らだな。」

もつ収集が全くつかないながらも、一行は何か全員で空港を出た。

「…なあリボーン、こつからどうすんの?  
ツナ達はもう少しひどい行けば良いのかわからない。」

「まあ待ってる。…すぐに奴がくる。」「  
リボーンはそういうとこヤリと笑った。

「奴?」

「ねえ…早く僕はボンゴレの本部に行きたいんだけど…。  
待つのは嫌いなんだよね。」

雲雀がイラついてきたらしい。  
今にもトンファーを出しそうな勢いだ。

「こつ…雲雀さんちょっと待って! もうすぐ誰か来るみたいですね

「…」

「……。」

(あああー…もつ誰か知らないけん呼べ来てよ~…)

「あ…。

おいッナ…あれ…。」

突然、山本が声を上げた。

「え?」

山本が指をさしていく方向を見ると、そこには黒いリムジン。

(コ…リムジン…)

初めて見る高級車に、少し圧倒されてしまつ。

「…あーあれは…」  
守護者全員が顔を向ける。

「よひ、弟弟子。  
大勢でのお出迎え感謝する。  
俺の元家庭教師と生徒までな。  
」

「…『ティーノさん…』」

「やつと来やがったか…」

「跳ね馬…」

「キヤツバローネ、ですか

「極限に誰だ…」

「ボンバーの兄弟子の方ですね。」

「お前の記憶力どうなつてんだが生」

「まあ髪型変わったるじしゃーねーって。」

颯爽とリムジンから出たのは、キャッバローネのボス、ディーノだった。

「ディーノさん、どうぞ入って……？」

「そりやあ可愛い弟弟子たちが来るんだからな。俺が9代目に出し出したんだ。

俺が案内したいってな。」

ディーノは爽やかに笑う。

「はあ……。」

「ま、立ち話もなんだし、早く乗るづけ。」

ディーノは親指を立て、後方のリムジンを指差した。

「あ、せーー。」

守護者たちばかりないとコマジンに乗り込んだ。

「おこでイーノ。」

「ん、なんだリボーン？」

「お前、弟弟子に嘘つこひんじやねーぞ。」

「ついてねえよ。9代目に申し出たのは本当だしな。  
……ただ、話してねえ事があるだけで。」

「フン、生意氣いふんじゃねえ。へなちょい。」

「ははは…ひつでえ」

そして全員が車に乗り込んだ。

「ロマーリオ、出発してくれ。」

「了解、ボス。」

（なんかすごい光景…）

ゆっくり周りを見渡して、かつてないこの異様な光景に、ツナはそわそわしていた。

運転はロマーリオ、助手席にディーノとリボーン。  
そして喧嘩を防ぐ為に自分の両隣に雲雀と骸。

思えば、今まで守護者全員で集まつたことなどほとんどなかつた。  
格段全員が仲が良い訳ではないし、本当に仲間だと思っているのか  
よく分からぬ者だつている。

（どうなるのかな…これから。）

この時の彼らがこれから自分達に課せられる試験を知るはずもない。

To be continued . . .

## 標的7 「到着」（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました！

尚、今まで取させて頂いていた出して欲しいキャラのアンケートですが、今回をもって終了させていただきます。

なので、次の投稿でアンケートを締め切りといたします。ご了承ください。

締め切りまじかです！どしどしリクエストお待ちしています\* + 極力リクエストにお答えできるように努力はいたしますが、場合によってはお答えできない場合もあります。

標的8「本部へ」(前書き)

今日はティイーノさんの他にアンケートで多數リクエストいただいた  
人の影がちらほりと…（> m <）

「ノルマ」本部 標的

「ノルマでここか?、ボス」

「ああ。」

「まだ本部に着いたらしく。」

ディーノがそこからロマーリオは車から降り、ドアを開けた。

「あ、ありがと!」「ロマーリオさん。」

「ほむつー。」なんか遭わなくて良こんだ!。

「まだ全體がおそれてこながら車から降つる。

「や、俺達はキャッバローネに戻るか。」

「ねえ。」

「え…ディーゼルさん達は本部に入らないんですか？」

「ああ。

入口まで行つたら案内役がいるはずだ。  
俺達は色々立て込んでてな。」

「…？ そうなんですか。

「…それじゃあ自分達で行きますね。」  
もちろんジナは元からリボーンに連れて行つてもいいといったが、

（なんか忙しないな…）

「じゅあな、また会おう。」

「はい、あつがとうございました。」

「あつがとうござわーー、ディーゼルさんー！」

「ありがとうございました。」

「極限に礼を盡つかー。」

皆口々に礼を言ごと、ティエーとロマーリオは去つて行つた。

「ツナ、どうせ迷うなら俺が案内する。  
リボーンは早速スタスターと歩いて行く。

「ちょ、リボーン！迷うの前提かよ！」  
そうは言いながらも、どうせ最初から案内してもらおうと思つて  
たので、ツナは素直にリボーンについて行つた。

他の守護者もツナに続く。

しかし雲雀はいつもに増して機嫌が悪そつだ。

「まだ着かないの

「まだだな

「ふうん」

雲雀とリボーンの素つ氣ない会話が突拍子も無く始まり、終わる。

「…ていうか…」  
木が結構生い茂つてゐし、人通りも民家とかも全く無い…  
ツナが恐る恐るリボーンに尋ねた。

「何言つてんだ、もうこれはボンバーの敷地だぞ。」

「 「 「え」 」 」

サラッとすうじい事をいつのボーンに、一同は田を見開いた。

「マフィアの敷地、ですか…」  
骸がポツリと呟くように言った。

「…それにしてもボンゴレって一体…。  
だからディーノさんはあそこで俺たちを降ろしたんだ…。」「  
そう、自分たちが降ろされたのは、ボンゴレの本部に入る門の前だ  
ったのだ。

「やつぱボンゴレってすげーのな！

なんかワクワクするぜ！」

「ちなみにボンゴレの本部の隣にはヴァリアー基地の本部もあるか  
らな。」

「ええっ！」

またも一同はリボーンに驚かされる。

同時に何人かの守護者達の目が光つたように見えたのは、気のせい  
ではない。

「じゃあスクアーロにも会えるかもしだれねえな！」

しかし、この事実に喜んでいるのはやはりこの男だけだらう。

「会いたくねえよバカ！」

(俺もできたら会いたくないよ…)

ツナだつて獄寺だつて、あのヴァリアーとの戦いが忘れられるはずがない。

「スクアーロにメールとかなきやだな！」

「　　「　　「　　「　　」。」」」」

：一同、沈黙。

「スクアーロとよくメールとかするんだよな～」

山本は携帯を取り出してカコカコとメールを打ち出す。

(山本、スクアーロとメール友…！？)

山本の社交性に勝てる者など絶対に他にはいないだろう。

「ま、後3分もすりゃ着くからな。」

「3分も…か」

『Subject: no title

Message:

久しぶりだなスクアーロ！

お前知ってるかもしだいけど、ボンゴレーラの代目の守護者がボンゴレのイタリア本部に召集された。

もつすぐ本部に着くから、会えたら会おうぜ

じゃあな～（^○^）／』

『Subject: Re:

Message :

それぐらい知ってる  
会うぜ、必ずな『

To be continued . . .

標的8「本部へ」(後書き)

最後までお読みいただきありがとうございました！

次回、遂にボンゴレイタリア本部に到着です＊ +

## 標的9 「ボンゴレイタリア本部(上)」(前書き)

ボンゴレイタリア本部に到着したツナ達の、予想外な案内役の登場です！

物語の進度が遅くてすみません；；

本当にちまちま進んでますm(—\_—)m

## 標的9 「ボンバーイタリア本部（上）」

聳えるものは、まるで城壁。  
その後ろには、もうひとつの城。

……建物に元気まで威圧感がだせるものなのだから、と懸念感じてしまつ。

(……俺がこの次期10代田?  
……もつ笑いしかでてこない)

「おこシナ、向いやへしてやがる」

「別に、将来の進路に真剣に悩んでただけ」

「やうか、10代田になる気になつたんだな。」

「違うよー逆に決まつてんだろー。  
決意を一層強くしたんだよもちろん」

「……今まで来とこで何言つてやがる、やつぱりお前は頭カラだな」

「なつ……」

「こりまでリボーンに刃向かう事が出来るよつた自分は、やはり怖いもの、まあ要するにマフィアに耐性が付いてしまったのかとツナは思つてしまつ。

更にはちよつと前まで獄寺を怖がつていたのが、雲雀や骸にまでなんの恐れも無く口出し出来るよつになつてしまつたのも事実。

……そんな自分が最近嫌で堪らない。

「はああ……」

「何ため息吐いてやがる。……入るだ。」

「うさ。……行いへ。」

一行は馬鹿デカい茶色い金属扉の前に立つた。

「……。」

「…………。」

「…………。」

「…………。」

「あ……あの……リボーン……」

「なんだ」

「これ……どうやつたら開くの？」  
ツナはその大きな扉を指差した。

「Xバーナーでも2、3発ぶつ放せ。開くぞ。」

Xバーナー2、3発で開く。

：：：そのリボーンの言葉は、その扉にかなりの強度があることを示している。

「開くべきやないよー壊れるの間違いだろーー。」

「冗談だ。」そのまま立つて、時期に開く。」

「からかうなよー。」

そして、一回が扉の前に立つてから20秒ほどが経過した。

「まだなの？」

雲雀が苛立ち始めた。

「極限遅いぞー。」

せつかちなア平も我慢が切れたらしい。

「も…もつかなーと待つて下さーー。」

わいつと聞えますから。」

と言った後、ツナはしゃがんで「それ」と耳打ちし始めた。

「リボーン！まだ開かないの？

つていうか何でこんなに待たされてるんだよ俺たち…」

「もうじき開く。

この時間は俺たちを霧の幻覚でないことをチェックする為の時間だ。  
カメラがどこかに内蔵してある。

…恐らくもうじき最終チェックも終わるな。」

「…ホントに?」

ツナは疑わしげに顔を上げる。

ガチャン!

「　「　「　「　—　」　」　」

突然、扉から大きな金属音がした。

ギィイイ…

「扉が…」

扉がゆっくりと開く。

「……自動で開くのかよ……」

見た目とは裏腹に、なかなか高性能である。

扉が徐々に開けられ、視界が広くなつていぐ。

「……！」あそこには誰かいる……」

田の良い獄寺が人影を発見した。

「え……あれって……」

山本が驚くように声を上げる。

扉の向こうには、長身で黒い服を着た男。

いや、最も注目すべきはそこではないだろ？。

銀色の、美しい長髪。

彼は仁王立ちしてツナ達ボンゴレ十代目一行を待ち構えていた。

「……スクアーロ……！」

「……いたせか豪華すぎるな……」

「え……何?・リボーン……」

「…………。」

ボンゴレ最強の暗殺部隊、ヴァリアー。

そのN.O.2である彼の登場は、一体何を意味するのだろうか。

To  
be  
con-  
tinued  
.

## 標的9 「ボンバーイタリア本部（上）」（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。これで、\*

感想や評価などをお聞かねになると本当に嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5709h/>

---

We are X !

2010年10月8日22時22分発行